生徒の多様性に即したポスター制作の考察

吉田　陽子[a]

[a] 湘北短期大学非常勤講師

【抄録】

美術教育において、水彩絵の具を使用する機会はしばしばある。未就学児であっても、保育園や幼稚園での造形活動に登場することは一般的であるし、小学校での図画工作でも、水彩絵の具を活用した絵画制作のカリキュラムは存在すると認識している。

本稿は、高等学校の美術Ⅰを履修する生徒を対象とし、水彩絵の具を活用したポスター制作の課題を考察したものである。生徒の実態を理解すべくアンケートを行ったところ、その１割は水彩絵の具の使用が未経験であった。この事実を目の当たりにし、筆者は生徒の多様性に即した指導を行う必要性を感じた。取り組みの一環として、筆者考案の「目標リサーチ」を実施することとし、その過程と成果、今後の課題についての考察を行う。

【キーワード】

ポスター作成、水彩絵の具、「目標リサーチ」

１、はじめに

新型コロナウイルスの影響により、学校現場の環境は大きく変化した。感染拡大防止対策のため、筆者の勤務する都立Ａ高校でも、４月の入学式は勿論のこと、例年通りのスケジュールで授業を展開することが叶わなかった。対面授業が再開した６月半ばまでは生徒の自宅へ課題を郵送し、各自の家庭で学習を進める形式をとることになった。生徒の登校が再開してからも、クラスの全員が揃い授業を行うには時間を要した。前例のない事態に生徒が不安を抱えるのは勿論のこと、教員側も戸惑う場面が多かった。

予定されていた行事の中には、やむを得ず中止を余儀なくされたものもあり、その一つには文化祭も含まれていた。文化祭を宣伝するポスターは、例年であれば美術を履修する生徒が作成を担っていた。これは筆者が着任する以前からの伝統で授業課題として採用されており、水彩絵の具を使用することを条件としていた。この課題では常々、水彩絵の具の使用に苦手意識を抱える生徒の様子に直面してきた。詳細は筆者の「ポスター作成における制作手順の考察」（2020）で述べた通りである。

しかし今年は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため文化祭の実施自体が困難となり、ポスターを制作する必要性が無くなった。従って、水彩絵の具を活用した課題の内容を変更しなければならず、その内容に頭を悩ませていた。そんな

矢先、A 区の主催するポスターコンクールの案内を受け取った。応募内容は、例年行っていた文化祭ポスターの課題と近しい条件であり、授業課題として採用するには適していた。また､生徒にとっては公の場へ向けての挑戦であり、入賞へ向けた明確な目標を持つこともできる。昨年度に考案したポスターの作成手順を見直し、より良い学びを追及するにはうってつけの機会だと感じ、授業課題として設定することに決めた。

２、現場の紹介

筆者はこの都立 A 高校に 10 年勤務し、全学年の美術を担当している。前年度から指導を継続する 2 学年、3 学年の実態はおおよそ掴めているが、今年度入学した 1 学年の生徒とはなかなか顔を合わせることが叶わず、6 月上旬の対面授業再開までは、手探りの状態であった。生徒の登校が再開するまでは自宅課題を配布し、各自の家庭で学習を行わせるという学校の方針が確定した為、対象となる生徒の自宅課題の作成を行った。2 学年、3 学年の内容は、前年の学びを下地とした課題設定が可能であったが、1 学年とはお互い面識のない状態である。アンケートなどで実態を把握する間もなく作成することになったため、自宅課題の内容は、なるべく生徒の負担にならない画材で行えるよう、配慮する必要があった。

以上のことを踏まえ、本稿の対象となる 1 学年の生徒の自宅課題は、レタリングとした。配布物は、課題の内容を説明したワークシート 1 枚と画用紙 16 切サイズ 1 枚の計 2 枚とし、身近な筆記用具で完結する内容である。描画材は、シャープペンシルやボールペンなど、生徒にとって馴染み深い文具の活用を主軸に提案し、着彩の有無や使用画材の制限は行わなかった。

回収した作品を見てまず驚いたのは、半数近くの　作品に着色が施されていたことである。色鉛筆を筆頭に、ペンやマーカーも多かったが、中には絵の具を使用した完成度の高い作品も 1 割程度の生徒に見られた。筆者はこれまで、絵の具を活用したポスター制作を 1 学年のカリキュラムに採用しており、水彩絵の具を使用することへの抵抗感を持つ生徒を、少なからず目の当たりにしてきた経緯がある。勿論、積極的に取り組む生徒も一定数存在するのだが、どちらかというと苦手意識を持つ生徒の割合が多いように受け止めていた。そのため自宅学習において絵の具の着彩を行うのは困難だろうと早合点していたのだ。

しかしふたを開けてみると、絵の具を積極的に活用して課題作品を仕上げてきた生徒の存在があった。この嬉しい事実を受け、気が引き締まった。志を高く持つ生徒の意欲に応えられるよう、より一層充実した学びを模索し提供していかなければならないと、気持ちを新たにした。

３、アンケート No. 1 の実施と結果

まずは、1 学年の生徒へ向けて「水彩絵の具の使用状況におけるアンケート」を実施した。アンケート No.1 の目的は、水彩絵の具の使用における取り組み状況の把握や意識調査を行うものとし、今後の授業内容向上と本稿作成に活用することを伝えた上で、了解を得た生徒のみ回答を求めた。アンケート No.1 実施対象者 106 名のうち、94 名の回答が得られたことから、以下の内容は生徒の実態を知る手立てになると考えられた。

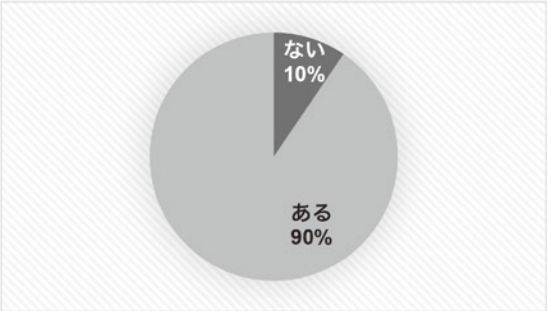
アンケート No.1 の内容は、これまでの水彩絵の具の使用経験の有無を問うところからスタートする。「ある」もしくは「ない」どちらかのくくりに進み、その後の質問に回答していくというものだ。使用経験の有無に良し悪しはないこと、個人の特定を行うことや成績に反映させることは一

切ないことを周知し、事実を記入してもらえるように協力を仰いだ。

その結果、1割の生徒に水彩絵の具の使用経験がないことが判明した（**図表1**）。その理由を該当者に調査したところ、「水彩絵の具を使用する機会がなかった」という項目に回答が集まった（**図表2**）。次に、水彩絵の具を使用した作品制作に興味や関心があるかを調査した。「ある」、「どちらかというとある」、「どちらかというとない」、「ない」のうち、「どちらかというとない」、「ない」という消極的な回答の方が多くを占めた（**図表3**）。この結果を受け、これから初めての描画材に触れる期待感を少しでも増やせるよう、配慮が必要であると感じた。

図表1

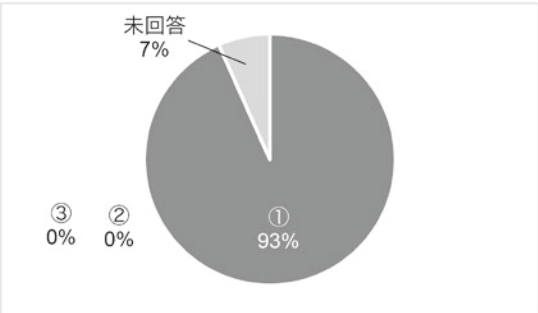
これまで水彩絵の具を使用し、作品制作を行ったことはありますか？



図表2

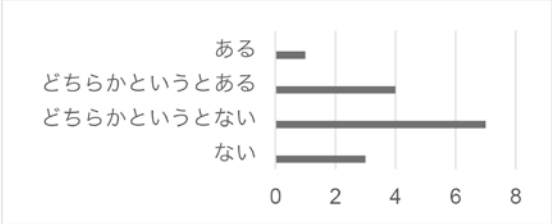
“ない”と回答した方のみ、当てはまる番号すべてに〇をして下さい。

① 絵の具を使用する機会がなかった。
② 絵の具を使用して、制作をしたくなかった。
③ 絵の具を使用できない理由があった。



図表3

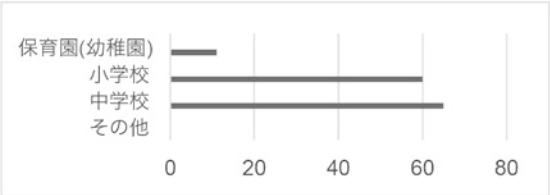
絵の具を使用した作品制作に興味・関心はありますか？
近いものを〇で囲んで下さい。
【ある・どちらかというとある・どちらかというとない・ない】



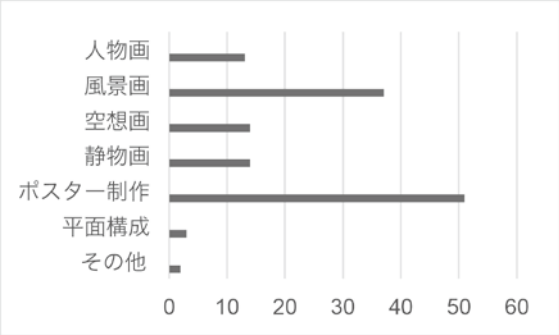
水彩絵の具の使用経験が「ある」と答えた該当者には、使用した時期や作品の内容、水彩絵の具の種類について質問し、具体的な使用経験を調査した。あてはまる項目すべてに〇をつけるよう指示した為、結果には複数回答も含まれる。「いつ使用しましたか？」の問いに対しては「中学校」との回答が多く、次いで「小学校」との結果が出たが、どちらも6割を超えていた（**図表4**）。義務教育期間には、学ぶ機会の多い描画材といえる。「どんな内容でしたか？」の問いに対しては「ポスター制作」が際立って多く、次いで「風景画」、その次に「人物画」「空想画」「静物画」が並んだ（**図表5**）。ポスターの制作は、義務教育期間での学校行事（合唱祭や体育祭など）と連携を持つこともあるので、経験者が多いと推測される。「どんな種類の水彩絵の具を使用しましたか？」の問いでは「わからない」との回答が5割近くを占め、次いで「アクリルガッシュ」、「ポスターカラー」「透明水彩」と続いた（**図表6**）。水彩絵の具とひとくくりにしても複数の種類が存在しそれぞれ違う特性があることを、半数以上の生徒は理解していない様子が推察される。

引き続き、水彩絵の具の使用経験が「ある」と答えた該当者へ向け、水彩絵の具の使用へ対する意識調査を行った。「水彩絵の具を使用した作品制作は好きですか？」との問いでは、「好き」、「どちらかというと好き」、「どちらかというと嫌い」、

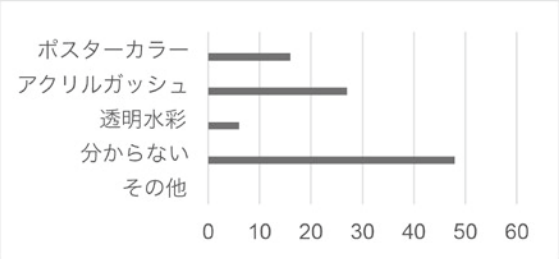
図表４
いつ使用しましたか？



図表５
どんな内容でしたか？



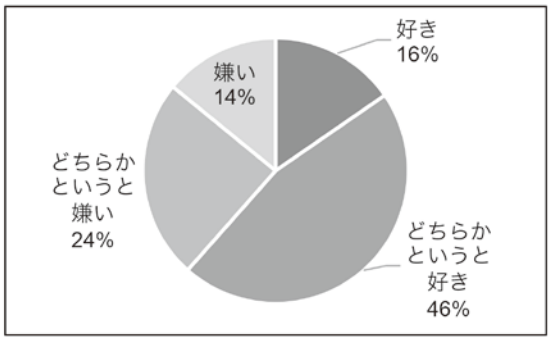
図表６
どんな種類の絵の具を使用しましたか？



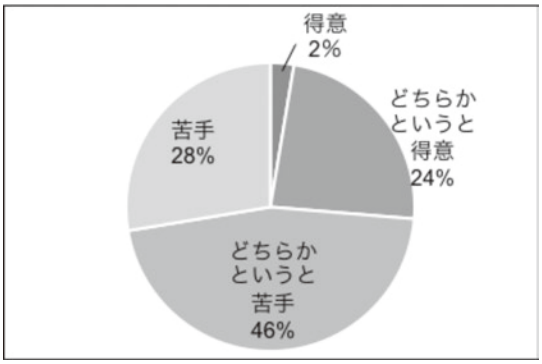
「嫌い」のうちいずれか一つの選択を求めたところ、「好き」、「どちらかというと好き」と好印象を持つ回答者が６割を超えた（**図表７**）。しかし、「水彩絵の具を使用した作品制作は得意ですか？」との問いでは、「得意」、「どちらかというと得意」、「どちらかというと苦手」、「苦手」のうち、「得意」、「どちらかというと得意」という前向きな意見は３割にも満たなかった（**図表８**）。

では、水彩絵の具を使用した作品制作において「どちらかというと嫌い」、「嫌い」、「どちらかというと苦手」、「苦手」と回答した要因はどこにあ

図表７
絵の具を使用した作品制作は好きですか？



図表８
絵の具を使用した作品制作は得意ですか？



るのか。それを探るため、まずは生徒が困難を感じると想定される具体的な内容を厳選し、以下に記すＡ～Ｄの４項目を設定し調査を行った。項目の内容は、現場で拾った生徒の生の声を参考にしたものであるため、あえて誤った内容も取り入れている。回答は複数可とした。

【想定される具体的な内容】

A.　絵の具に混ぜる、丁度良い水の量が分からないから。

B.　絵の具のチューブに無い色（ピンクや水色など）を作る時、どの色とどの色を混ぜたらよいのか、分からないから。

C.　イメージと違う色を塗ってしまった場合、やり直すことができないから。

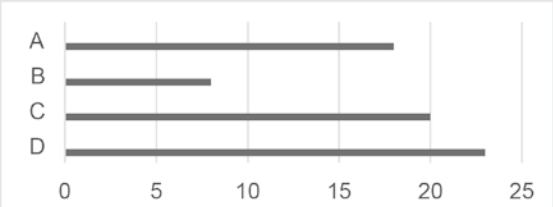
D.　筆の扱いが、難しいから。

結果は、Dに多くの票が集まり、C、A、Bと続いた（**図表９**）。次に、上記以外の意見を調査するべく、自由記述欄も設けた。そこには複数の似た意見が寄せられたため、代表的な内容を以下にまとめた。

【自由記述欄に寄せられた代表的な意見】

・筆で塗るとはみ出してしまう。
・色ムラなく塗ることができない。
・絵の具が乾くと濃さが変わるので難しい。
・色がにじむので思い通りにいかない。
・色が混ざって汚くなってしまう。

図表９
想定される具体的な内容



これらの結果を受け、水彩絵の具で使用する道具の基礎知識を身につけさせ、基本的な扱いを解説し理解させる重要性を感じた。しかし導入時には、これまで積極的に向き合うのが困難であった生徒にも理解しやすく、扱いに慣れている生徒にも応用が利くような授業を行う必要があった。そのためにまず、生徒たちへ現状を伝える事が今後の展開へのカギになると見込みを立て、アンケート結果のフィードバックを行うことから始めた。このフィードバックの中では、さりげなく水彩絵の具や道具に関する基本的な知識も盛り込み、その後の制作活動へスムーズに移行できるよう配慮した。

４、課題の設定と「目標リサーチ」

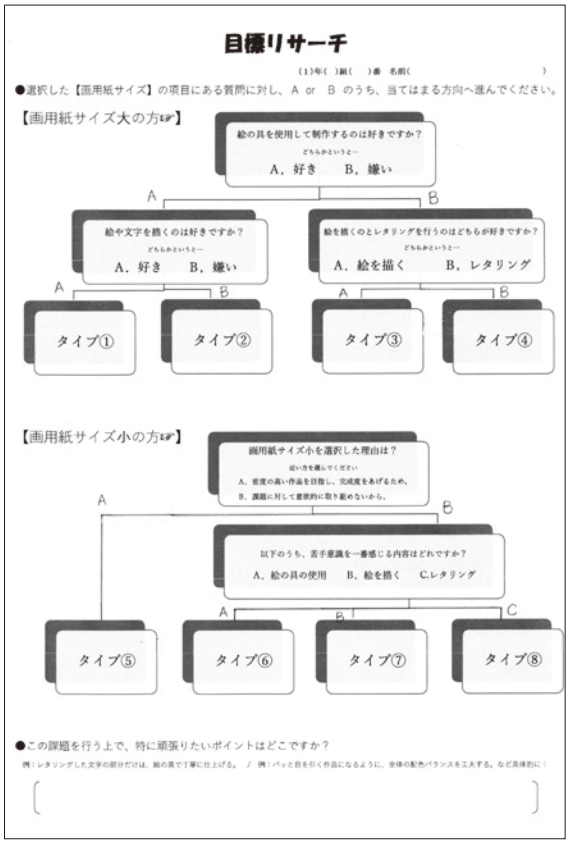
課題名は「ポスターコンクール」とし、美術Ⅰを履修する１学年の生徒106名を対象とした。都立Ａ高等学校の所在地を管轄しているＡ区が主催した、ポスターコンクールのテーマに沿った内容とした。ただしコンクールに応募することは必須条件とせず、生徒個人の判断に委ねた。コンクールへの応募を目指す生徒には、応募条件に則した四つ切サイズ（54.2㎝× 38.2㎝）の画用紙を配布したが、応募の意思がない生徒へは、その半分となる八つ切りサイズ（27㎝× 38㎝）を配布し、負担を軽減した。ただし課題の採点時には、四つ切サイズは10点満点での採点に対し、八つ切サイズは７点満点とする旨を周知し、生徒の意欲・関心の高さを鑑み調整を図った。コンクールに応募する、しないにかかわらず、美術Ⅰの課題として共通して提示した条件は、以下の５項目である。

【共通の条件】

１、テーマに関連した標語を入れ、レタリングを行うこと。
２、水彩絵の具を使用すること。（絵の具の使用は一部分のみでも可。他の描画材の併用可。）
３、既存のポスター等と類似した図柄、既存のキャラクター、商品を特定できる図柄、既存のロゴマーク（例：エコマーク、グリーンマーク等）の使用は不可。
４、画用紙は縦長の向きにすること。
５、提出期限を厳守すること。

条件と課題のテーマを説明したあとは、各自のペースでアイデアスケッチなどに取り組むのが通例であったが、各自の活動に移行する前に筆者考案の「目標リサーチ」を実施した（**図①**）。「目標リサーチ」とは、課題「ポスターコンクール」の制作を進める上で、作品内のどの要素に焦点を絞り進めていくかを探る、簡単な質問チャートのことである。これを行うことで、生徒自身が得意とする分野や力を入れたい要素を自覚させることを

図①



ねらいとした。

「目標リサーチ」を行うと①～⑧タイプに分類されるが、各タイプによる良し悪しはないことを周知した上で、各タイプへ向けて制作手順の具体的なアプローチを行った。内容は以下の通りである。

・タイプ①　時間配分を考え、計画的に進めましょう。制作中に行き詰った場合は一人で悩みを抱え込まず、早めに声をかけてください。

・タイプ②　画用紙の全面を絵の具で仕上げることが出来ると、作品の完成度がより高く見えます。今まで身に付けた技法を取り入れたり、今回新たに学んだ水彩絵の具のテクニックを積極的に活用するのも良いでしょう。

・タイプ③　全体の画面構成や、細かな絵の描写に力を注いでみましょう。絵の具を活用した着色は一部でも構いません。マーカーや色鉛筆などの併用も可です。

・タイプ④　オリジナルのレタリングを、しっかり作り込んでみましょう、文字のサイズや形にこだわると、メリハリが出ます。レタリング部分は特に、絵の具で丁寧に仕上げられると良いですね。

・タイプ⑤　テーマに沿ったデザインを吟味し、積極的に取り組みましょう。密度の高い作品となるよう、水彩絵の具を全面に活用できると良いですね。

・タイプ⑥　絵の具での着色は、背景のみ、文字のみなど、挑戦しやすい箇所だけでも構いません。思い切ってチャレンジしてみましょう。手が進まない場合は悩みを一人で抱えず、気軽に声をかけて下さい。

・タイプ⑦　絵の具での着彩や、レタリングに力を入れましょう。資料の本から絵を取り入れたい場合は、トレーシングペーパーで写し取り、画用紙に転写させるとスムーズです。

・タイプ⑧　なるべく丁寧な字で文字を書いた後、その文字の線の左右に肉付けを行ってみましょう。文字全体を太くするだけで、ゴシック体のように見栄えのするレタリングが手軽に作れます。

その後、生徒各自がより明確な目標を定められるよう、力を注ぎたいポイントを、具体的に記入させる時間を設けた。明確な目標を定めてから制作活動をスタートさせる大切さは、年々強く感じるようになっている。これまで筆者は、生徒一人一人との関わりに重きを置いていたが、生徒自身が前向きに課題と取り組もうとする意欲なくしては進まないことを、痛いほど学んできた。寄り添うだけでなく、生徒たちが持つ力を、存分に引き出せるような指導を常に模索している。

各自の活動に移行してからも、各クラスの制作進度を見ながら、毎時間の冒頭に技術指導を行った。条件の１に挙げられたレタリングは、自宅課題での下地があったため見通しを持って取り組めた印象にあるが、条件の２にある水彩絵の具の使用については、主に基本的な扱いを中心に細やかな指導を重ねた。

５、アンケート No.2 の実施と結果

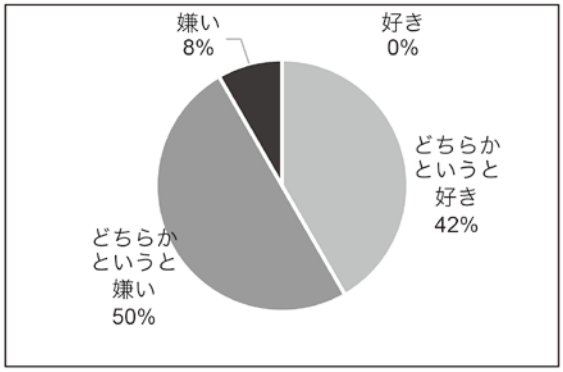
本節では、課題「ポスターコンクール」終了後に行った、アンケート No.2 の結果を記す。水彩絵の具の使用へ対する意識が、今回の課題を通してどのように変化したかを調査したものである。アンケート No.2 の対象者は、アンケート No.1 を行った 94 名のうち、課題「ポスターコンクール」の作品制作を行った 87 名である。アンケート No.2 ではアンケート No.1 と同様、課題「ポスターコンクール」以前に水彩絵の具の使用経験の有無から問い、それぞれの意識の変化を分析する。

まず、これまで水彩絵の具を使用した経験が「ない」と答えた１割の生徒へ対し、絵の具を使用した印象について「好き」、「どちらかというと好き」、「どちらかというと嫌い」、「嫌い」のうちいずれか一つの選択を求めたところ、「好き」、「どちらかというと好き」と好印象を持つ回答者が４割を超えた（**図表 10**）。使用前に水彩絵の具への興味・関心を調査した際には消極的な回答が７割を占めたことと比較をすると、実施前よりは明るい結果となった。具体的な理由を記入する回答欄には、「手が汚れる」、「準備が大変」、「克服まではいかなかった」などの声はあったものの、「思い通りにいかなかったけど楽しい」、「意外と簡単だった」、「そこまで難しくなかった」、「グラデーションが割と上手にできた」など、前向きな意見も見受けられた。

図表 10

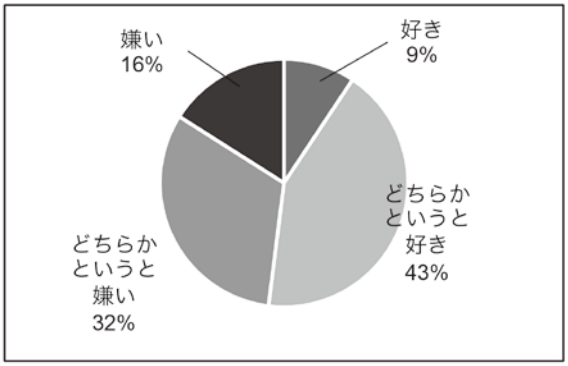
課題「ポスターコンクール」を終え、絵の具を使用した印象について、近い内容に〇をしてください。

【好き・どちらかというと好き・どちらかというと苦手・苦手】

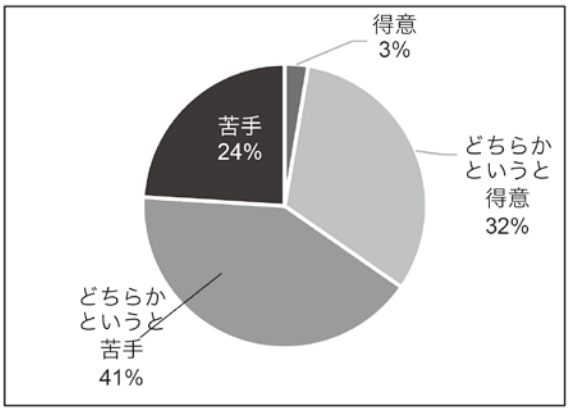


次に、水彩絵の具の使用経験が「ある」と答えた該当者へ向け、課題「ポスターコンクール」制作後の水彩絵の具の使用へ対する意識調査を行った。「水彩絵の具を使用した作品制作は好きですか？」との問いでは、「好き」、「どちらかというと好き」、「どちらかというと嫌い」、「嫌い」のうちいずれか一つの選択を求めたところ、「好き」、「どちらかというと好き」と好印象を持つ回答者が62％から56％に減少した（**図表 11**）。しかし、「水彩絵の具を使用した作品制作は得意ですか？」との問いでは、「得意」、「どちらかというと得意」、「ど

図表 11
絵の具を使用した作品制作は好きですか？



図表 12
課題「ポスターコンクール」を終え、絵の具を使用に対する印象は？



ちらかというと苦手」、「苦手」のうち、「得意」、「どちらかというと得意」という前向きな意見は、25％から 35％へと増加した（**図表 12**）。具体的な理由を記入する回答欄には、「想像した色を作るのが苦手だったけど、今回の作品では作ることが出来たから」、「塗るのが得意ではなかったけど、割とムラなく塗れたから」など、成功体験を重ねた生徒の意見も挙がったが、「細かいところを塗るのが難しい」、「字がつぶれてしまう」など筆の扱いに困難さを抱える意見や、「同じ色を作れない」、「塗りたい色がでない」など混色に苦戦する意見は多数寄せられた。

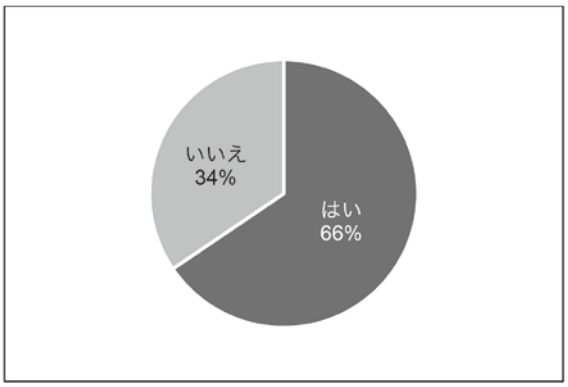
これらの結果を踏まえ、生徒が抱える悩みには多くの類似点があることが分かった。今後は実践の時間を増やし、水彩絵の具への体験を多く持たせるように指導計画の調整を行う必要があると感じた。

６、取り組みの振り返りと今後の課題

課題「ポスターコンクール」の制作を進める上で、作品内のどの要素に焦点を絞り進めていくかを探るため、筆者考案の「目標リサーチ」を行った。生徒自身が得意とする分野や力を入れたい要素を自覚させることをねらいとしたものだったが、有効活用できたかどうかを、課題の振り返りで調査した。対象者はアンケート No.2 と同様の生徒 87 名である。

「目標リサーチ」は制作を進める過程で役立ったかを問う質問に対し、66％の生徒が「はい」と回答した（**図表 13**）。具体的な理由としては、「目標が明確になった」、「自分に合ったやり方が分かり、進めやすかった」、「自分の得意なことが分かった」などの意見が多く見られた。反対に「いいえ」と回答した生徒の具体的な理由には、「（目標リサーチを）意識していなかった。」、「（目標リサーチ自体が）よく分からなかった」、「予想した内容

図表 13
目標リサーチは、制作を進める過程で、役に立ちましたか？



以外のところに時間を取られた」などが挙がった。割合としては「目標リサーチ」を有効活用できた生徒が多く取り組みは役立ったといえるが、「いいえ」と回答した生徒の言葉を真摯に受け止め、理解されやすいアプローチを研究していかなければならないと感じた。

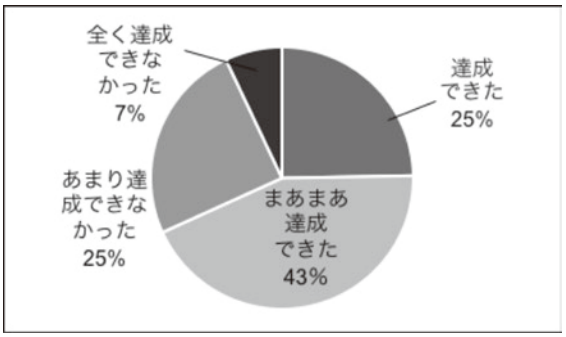
課題の振り返りでは、生徒各自が立てた具体的な目標に対する、達成度の調査も行った。「達成できた」、「まあまあ達成できた」、「あまり達成できなかった」、「全く達成できなかった」のうち、いずれか一つの選択を求めたところ、「達成できた」、「まあまあ達成できた」との回答が7割近くにも上った（**図表 14**）。具体的な理由に「絵の具は苦手だったが、水の分量に気を付けると塗りやすくなりうまくいったから」、「提出期限までに完成させることができたから」、「頑張って作った色に満足したから」などの成功体験が見られた。反対に「あまり達成できなかった」、「全く達成できなかった」と回答した生徒のほとんどが、理想通りにいかなかった箇所を取り上げていた。

このことから生徒たちの多くが、作品の最終的な仕上がりを重視し、結果へ結びつける傾向にあることが推察される。筆者は日頃から生徒達へ向け、試行錯誤する姿や果敢に挑戦する過程を評価しており、必ずしも結果だけで判断しないことを伝えてきた。しかし、限られた時間の中で制作に取り組む生徒の立場からすると、満足のいく仕上がりを最優先に考えるのは自然な流れなのかもしれない。今後の課題の一つとして、生徒の成功体験を増やし、美術を愛好する心を育ませる取り組みを増やしていきたいと考えている。

図表 14

自己目標は達成できましたか？　当てはまる内容を〇で囲みましょう。

【達成できた・まあまあ達成できた・あまり達成できなかった・全く達成できなかった】



今年は世界的にコロナウイルス感染が広がり、日常生活に様々な変化が起こった。学校現場においても一時期は休講となり、対面授業再開後も様々な制限が出された。生徒たちは不安な気持ちを抱えながらも、授業では意欲的な取り組みを見せてくれた。これまで筆者は、美術の活動に苦手意識を持つ生徒への指導を主軸に据え授業展開を行う傾向にあったが、自宅課題の作品やその後の作品制作を採点する中で、気持ちに変化が生まれた。高い志を持って制作活動へ臨む生徒の熱意に、心が大きく動かされたのだ。そのエネルギーに応えられるような指導も平行していかなければならないことを痛感し、今年は新たな挑戦を行った。

課題「ポスターコンクール」では、美術の授業課題としてだけでなく、都内A区の主催するコンクールへの参加も行った。募集要項の条件を満たした39名の生徒がコンクールに応募したところ、喜ばしいことに4名もの生徒が入賞を果たした。打ち分けは、最優秀賞1名、金賞1名、銅賞2名である。該当の生徒はA区役所での展示や賞の贈呈、学校長からの表彰など、様々な形で評価を受けた。授業内において各クラスに結果を報告した際には、生徒達から自発的に拍手が起こり健闘をたたえるという、素晴らしい一幕もあった。これらの挑戦は、例年通りの取り組みでは味わえなかった今年ならではの大きな収穫となった。これからもコンクールなどを活用し、様々な挑戦を続ける必要性を感じた。

今後の方針としては、生徒たちがより意欲的に取り組めるような課題設定を研究し、各自が持つ力を存分に引き出せるような、実態に合わせた細やかな指導を柱としていきたい。特に、本稿で取り上げた水彩絵の具という描画材は、美術教育の中でも重要な位置を占めると考えられる。引き続き水彩絵の具の使用における基礎・基本の徹底指導を行いながら、苦手意識の改善を目指した学習を模索すると同時に、志の高い生徒への応用的な指導も平行させるよう、実践を積み重ねていく所存である。

引用文献

1　吉田陽子（2020）「ポスター作成における制作手順の考察」湘北紀要（41）p.179 ～ 187

生徒の多様性に即したポスター制作の考察

Consideration of producing posters with a variety of students

Yohko YOSHIDA

【abstract】

There are many opportunities to use watercolors in art education. It is common for preschoolers to use watercolors in art activities at nursery schools and kindergartens, and it is also common for elementary school students to use watercolors in their art curriculum.

This paper examines the challenges of using watercolors to create posters for students taking Art I in high school. When I conducted a questionnaire to understand the actual situation of the students, I found that 10% of them had no experience using watercolors. Seeing this fact, I felt the need to provide instruction that would be responsive to the diversity of the students. As a part of my efforts, I decided to conduct a "target research" designed by the author, and this paper will discuss the process, results, and future issues.

【key words】

producing posters, watercolors, target research